法学部政治学科２年　小口由貴(09012105)

１　はじめに

●期間：2010 年 8 月 24 日(火)～9 月 3 日(金)　11 日間

●訪問施設：フィリピン　メトロマニラ（パサイシティ）『Pangarap Foundation』

●目的：少年たちと接することで、彼らが本当に必要としているものは何か、彼らが抱える問題は何なのか、ということを探り、これからどのように彼らと関わっていくのがベストなのか、どのように援助の手を差しのべるのがいいのか、という答えを導くため。

●主な活動：

・日本の文化紹介(日本語、箸の使い方など)

・勉強(特に英語)や宿題のお手伝い

・家庭訪問→多角的に彼らの生活の様子をみることで、彼らが何を必要としているのか、どんな問題を抱えているのかをより理解するため

・子どもたちと会話→お互いの交流や信頼を深めるため

２　“Pangarap Foundation”とは...

マニラ首都圏の南西部、パサイ市に施設を持つカトリック系の NGO。1989 年から活動している組織である。8 歳～18 歳までの少年およそ 80 人(2010 年 8 月 31 日現在)の世話をしている。この施設には路上から施設を訪れた子どもが試しに入ってみる「ドロップインシェルター(仮宿舎)」と施設での生活に慣れ、定住することを決めた子どもが暮らす「レジデンシャルシェルター(定住用宿舎)」の二種類がある。それぞれの宿舎に寮父母が 2 名ずついる。その他に学習指導をする教師 2 名、相談役の心理学者 1 名、ソーシャルワーカー3 名も子どもたちの面倒をみる。

このNGOはフィリピン人自身がオーガナイズをしていて、他のNGOよりも規模が大きくモデル的な団体であり、特に興味深いのは、施設にやってくるストリートチルドレンの家庭にまでふみこんで、子どもたちの支えになろうとしている点である。

☆どのような少年が滞在しているのか？

・路上で生活をしていた少年

⇒彼らは一人でやってくることはほとんどなく、<u>ストリートエデュケーター</u>とともにやって来る。

※<u>ストリートエデュケーター</u>：路上に暮らす子どもたちを訪ねて歩き、彼らが路上生

活から抜け出せるよう、相談にのったり、施設を紹介したり、様々な働きかけをするスタッフ

・経済的に厳しいまたは学校へ通う環境が整っていない家庭の少年

・兄弟やいとこに誘われてやってくる少年

・職業訓練に通う少年

☆1 日のスケジュール例(ドロップイン･シェルターの少年)

7:00　起床、掃除

7:30　朝食

遊び、手工芸、キャンドル作り、勉強、セラピーetc

11:00　お祈り

12:00　昼食

休息、カウンセリング、勉強(チュートール)、スポーツ、洗濯、シャワーetc

18:30　夕食

自由時間

21:00　消灯、就寝

※それぞれ少年に責任感を持ってもらうために食事の用意や片付け、施設内の掃除など、役割分担が決まっている。

3　活動内容詳細

⇒お昼と夜ご飯は少年たちと同じものを一緒のテーブルでいただいた。

8 月 24 日(火)

16 時ごろにマニラに到着。以前から仲の良かった施設の少年が空港へ迎えに来てくれた。タクシーの中で前日に起こったバスジャックの話(この話はこの後の日々で会う人々から“この事件のことは知ってる？”とか“この事件があってフィリピンにくるのは怖くなかったの？”などと事件に関することをよく聞かれた)や他の少年たちはどうしているのか、などの会話をしながら宿舎へ向かった。私は今回でフィリピンへの渡航は 7 回目になる。だから、もう異国の地という感じがせず、戻って来たんだな…といった感じの方が強かった。今までは、現地の人(特に貧富の“富”の部分にいるお金持ちの人々)はこのあまりにも広がり過ぎている貧富の差になにも感じないものなのか、と疑問に思ったものだが、何度もフィリピンを訪れていると、フィリピンに住む人々はこの貧富の差が当たり前の社会になっているのではないか、と感じるようになった。

宿舎に到着をして、すぐに訪問先の「Pangarap Foundation」へ挨拶をしにいった。久しぶりに施設へ訪問するのはやはり毎度緊張する。でも、“hello yuki, kumusta ka na(=how are you)?”と私の名前と共に声をかけてくれる彼らに会うと、それが取り越し苦労だとわかる。彼らがいつも私を温かく受け入れてくれるのには感謝したい。

8 月 25 日(水)

10 時に施設を訪問して、まずはスタッフの方と私の滞在スケジュールを確認した。

この日は少年たちと会っていなかった穴埋めのために、特に、彼らの話を聞くことに努めた。施設から出て行ってしまった少年の話、彼らの学校での話や恋愛話など話題に尽きなかった。5 ヶ月ぶりに彼らに会って、彼らの成長ぶりを見れたのはこの上なく嬉しかった。少年が施設から出てしまった理由としては、・喧嘩のし過ぎ、またはその勝敗を受け入れられなかった、窃盗、電子機器の持ち込み(基本的に施設への持込は禁止)、ドラックやタバコ・飲酒、自分の役割をするのが面倒になった、施設生活がつまらなくなった　etc…が挙げられた。せっかく施設へやってきても、きちんと最後まで学校を卒業していく少年は少ない。彼らをみていても、人生は一筋縄ではいかないことが分かる。

8 月 26 日(木)

10 時に施設訪問。少年“Paul”から「友だちを紹介したいから小学校へ来てよ！」と誘われたので、突然、彼と一緒に小学校へ行くことになった。Paul は 14 歳だが小学校 5 年生に通う。日本では適齢期を過ぎて学校へ通うことはほとんどないと思うが、フィリピンで彼のようなパターンは珍しくない。ぼそっと彼が「僕のクラスメートは自分よりも小さいんだ。」と手で身長が低いジェスチャーをした。それでも、勉強を続けようと試みる彼らを応援したいと感じた。

午後は少年たちに基本的な日本語(あいうえお･数字など)を教えた。また、持っていた指差し会話帳を使って発音あてクイズをした。少年が日本語を読み、その発音を聞いて私が何のことを言っているかを当てる、という単純なクイズ。自分の母国語以外の言葉を口にだして話すことが楽しいようで、特に、その発音があっていると少年たちはにやっと喜んだ。このことから、何かを学ぶことの楽しさを知ってもらえたらと思いながら、彼らに日本語を教えた。

この日はスタッフの誕生日ということで、バースデーケーキを少年たちと買いに行き、みんなで祝った。フィリピン人の明るい性格からか、こういう祝い事には大変盛り上がった。

8 月 27 日(金)

10 時に施設訪問。午前中は少年たちと会話をしたり、この日は逆にタガログ語を教えてもらった。また、この施設にはそれぞれの少年にロッカーがあり、少年たちにそのロッカーの中を見せてもらった。ロッカーの中はそれぞれ個人差があり、綺麗にデザインしている少年もいれば、簡素なロッカーもあったりで、少年の性格が表れていた。多くの少年と共同生活を送っている中で、自分だけの空間は唯一ロッカーということを考えれば、ロッカーは自分の部屋のような感覚なのかなと思った。

午後は少年たちのリクエストに答えて、箸の使い方を教えた。既に使える少年もいたが、まず、箸の持ち方を説明し、次に実際につかめるように m&m's のチョコレートをつまんでもらうことにした。始めは苦戦しているようだったが、教えた少年たちはなかなか上達が早く、すぐに上手にチョコレートをつまむことができ、自分の口に運ぶのも容易に行っていた。終わった後に、使用した割り箸は少年たちにあげたのだが、その割り箸を夕飯まで大事に保管しておいて、その日の夕飯を割り箸で食べている少年がいたのには笑ってしまった。

8 月 28 日(土)

9 時に施設訪問。施設に実習へ来ている大学生が施設の少年 “Arvin(15)”の家へ家庭訪問するので、私も一緒に同行した。Arvin の家は施設から 1 時間ほど北西に行ったマラボン市にある。モニュメント駅まで LRT で行き、そこからジプニーに乗り換えるのだが、その前に Arvin はモニュメント駅付近を案内してくれた。というのも、Arvin が施設に来る前に彼はモニュメントの路上で暮らしていたからだ。「以前はここで寝ていたんだよ」と大通りの脇を示したり、それから、「僕の友だち！」と路面でキャンディーとタバコを売る少年たちに挨拶をした。その近くに教会があり、その隣の空きスペースにストリートエデュケーターがよくやって来て、いろいろなことを教えてくれたり、ゲームをして遊んだんだと話してくれた。このストリートエデュケーターが今の施設に来るきっかけになったことを私はこのとき知った。“Welcome to Malabon”というオブジェを目印に私たちはジプニーから降りて、徒歩で Arvin の家へ向かった。Arvin は実のお父さん、お母さんを含め 10 人家族だ(5 人兄弟、3 人姉妹)。彼は兄弟の中で一番年下。比較的気が弱い、従順な性格はこういう兄弟構成からきているものだったのか、と納得してしまった。Arvin は家へ着くとさっそく家族のために持って来たお土産(石けん、歯磨き粉や妹のための洋服など)を広げて見せた。施設の少年を見ていると、彼に限ったことではなく、多くの少年は家族の元へ帰るときはたくさんのお土産を持って行く。しばらくすると、彼のお母さんが訪問者の私たちにビスケットとジュースを振る舞ってくれた。厳しい生活をしている中、ささやかだけれどもこのような気遣いはとても心が温まる。少し落ち着いたところで私はインタビューをしてみた。お母さんは主婦。お父さんは Malate という地域にある韓国料理店のガードマンをして働いていて、月給は 7,000 ペソ(約 14,000 円)もらっているそうだ。彼は 2008 年のときに小学校 6 年生をストップしてしまったと聞いた。「なぜ？」という私の質問の答えはこうだった。「だって、僕の親友が学校をやめちゃったんだ...」それ以来、彼は路上で暮らすようになったようだ。お母さんは学校へ行ってほしいと願っているように、他の少年と比べて、彼の家族には問題はなさそうにみえた。では、どうして彼は路上へ出てしまったのだろうか？おそらく、住む家、つまり、家族 8 人が 8～10 畳の部屋一部屋に住むには狭いために、他に自分の居場所を求めて、仲間のいる路上を彼は選択したのではないかと感じた。しかし、路上にいては、人生が限られてしまう。そんな中、彼にもう一度勉強するチャンスを与えてくれた、ストリートエデュケーターと施設の存在は大きい。最も一番大事なのは本人の気持ちなのだが、まずは来年の 3 月に小学校を卒業してほしいと願う。

帰る時間がお昼時だったので、私たちはハンバーガーショップで食事をして帰った。そのときに Arvin は一つハンバーガーを食べずに取っておいて、持って帰ろうとしていた。私が「なんで食べないで持って帰るの？」と尋ねると、「Angelo(施設の中で一番年齢が低

い少年)にあげるんだよ。だって彼はいつもお腹を空かせているから！」貧しいけれど、できる範囲でみんなで助け合うフィリピンの人々。そんな優しさが彼にも表れていた。

8 月 29 日(日)

10 時に施設訪問。午前中は少年の過去の話や施設を卒業して働いている少年の話を聞いたり、バスケをしている少年たちと一緒に混じって遊んだ。

午後は少年 2 人と共に Tondo 地区へ行って、彼らの家を訪問した。また、彼らの家の近くに、以前施設にいた少年の家があり、その少年は今どうしているのか気になったので、その少年の家も訪問することにした。

8 月 30 日(月)

9 時に施設訪問。この日も実習できている大学生が施設の少年“長男；Rausel(16)”と“3 男；Paul(14)”兄弟の家へ家庭訪問に行くので、私も同行した。この施設には兄弟で滞在している少年が多い。施設にいる Rausel はダンスが上手くて、おしゃれ好きなごく普通の少年。そんな彼が自分の家に戻ると一変した。悪い意味ではない。「(唯一いなかった)2 番目の弟を呼んできて！」と Paul に命令する。その 2 番目の弟が戻ってくるなり、説教が始まった。私はタガログ語が少ししか分からないが、弟に向かって怒っているのは分かった。後から聞くと、弟は通っていた専門学校を辞めてしまい、ドラックとアルコールを飲む少年になってしまい、そのことに対して Rausel は怒っていたようだ。彼のお父さんとお母さんはすでに亡くなっている。施設では、面倒くさいことはあまり好きではない Rausel だが、家での彼の姿は一番上の兄として、父親の代わりのような責任感があったのには驚かされた。誰よりも Rausel が自分の兄弟のことを思っているのだなと感じずにはいられなかった。まずは自分が早く自立をして(職得て)、家族を助けないといけない…そう思って生活している施設の少年は実は多いのだな、と彼の家を訪問して実感した。しかし、彼はまだ 16 歳だ。

日本でいったら、高校 1 年生だろうか。そのような使命感を持つには若すぎるのではないかと思った。

午後は施設の少年“Alex”のいとこの家が施設のすぐ近くにあり、そのいとこの誕生日パーティーがあるというので、一緒に参加した。フィリピンの一般家庭を見るのにいい機会だった。

8 月 31 日(火)

10 時に施設訪問。午前中は少年たちと会話をしつつ、日本語を教えた。少年たちの名前を日本語で書いてあげると、「今度からこれを僕のサインにしよう」という少年もいて、喜んでいるようだった。

午後は高校 2 年生の宿題である裁縫のお手伝いをした。また、英語で話したいという少年がいたので、英語でお互い会話の練習をした。

9 月 1 日(水)

施設の訪問はお休みをして、日帰りでイフガオ州に住む友だちを訪ねに出かけた。田舎の生活を体験できるいい機会に恵まれた。

9 月 2 日(木)

午前中は以前施設にいた少年“Hernani”を訪ねに行った。

午後は施設に戻り、少年たちと会話に弾む。合間に宿題を手伝ったり、英語や日本語を教えたりして、最後の日を思う存分彼らと過ごした。

夜は私のリクエストに答えてくれて、彼らが即席でプチダンスショーを行ってくれた。

9 月 3 日(金)

最後のお別れを言うべく、朝 6 時ごろに施設を訪問した。彼らは私がまた来るということを知っているからか最後の別れはいつものようにあっけなかった。でも、私は彼らが自分の夢を抱き続けることを諦めないでいてくれることを願って、フィリピンを後にした。

４　まとめ＆感想

私がフィリピンにできる限り足を運んで少年たちと接しようと思ったのは、初めてフィリピンを訪問した際に一度だけの訪問でフィリピンを語ることはできないと感じたことと、私たち日本人は金銭的・物質的な支援をしがちだけれど、その支援の仕方に疑問を持っていたことから。

7 回の渡航を経て今思うのは、子どもたちとの交流・支援は、決してより多くのお金を届けることではない。互いにできるだけ関わりあいを持ち、絆を築く努力をすることで、心と精神のつながりを作り、それぞれの世界を広げることによって、お互いの可能性を伸ばすことが大事だということだ。子どもたちが本当に必要としていることは、お金や物だけではなく、むしろそれ以上に「自尊心」や「視野」、「夢」、「絆」を広げ深めることだと、彼らと今まで長い時間接していて、そのように感じる。“たとえ僕らが孤独感を感じていても、写真を撮ったり、お互いの問題をシェアしたり、アドバイスしあったりするような本当に簡単な方法で、ユキ(私の名前)は僕らをハッピーにしてくれたよね”と、私が尊敬する施設の少年から帰国後このようなメッセージをもらった。「時間と労力・愛情・友情」をかけるのが、私にできる最良の支援であり、それを続けていくことが、私の役割だと思う。続けていくこと…それによって、さまざまな人との信頼関係が生まれ、それが活動の幅も厚みも大きくしていくと信じたい。